

文学研究科学位論文審査及び最終試験に関する取扱要領

この取扱要領は、中央大学大学院学則及び中央大学学位規則に基づき、学位論文（修士論文及び課程による者の博士論文をいう。）の審査並びに最終試験について、必要な事項を定める。

学位は、所定の年数以上在学し、修了に必要な単位を修得し、かつ、必要な研究指導を受けたうえ、学位論文の審査及び最終試験の評価について、それぞれ合格した者に対して授与する。

1. 学位論文審査について

学位論文の審査は、学位授与方針を踏まえて、以下の観点について、修士学位又は博士学位を授与するに十分な水準にあるかどうかを審査する。

修士論文審査の評価は、A（100点～90点）、B（89点～80点）、C（79点～70点）、D（69点～60点）を合格とし、E（59点以下）を不合格とする。

博士論文審査の評価は、合格又は不合格とする。

（1）テーマ設定に関して

- ・問題設定がこれまでの研究に対して重要な意味を持つか。
- ・問題意識が明確かつ課題設定が合理的であるか。

（2）研究方法の適切性に関して

- ・研究目的を達成するためにふさわしい研究方法が用いられているか。
- ・必要な研究上の倫理に対して適切な配慮がおこなわれているか。

（3）論文構成と論理性に関して

- ・論文全体の構成が適切で明確な結論へと導かれているか。
- ・考察の展開が論理的で必要な論証がなされているか。

（4）論文の形式に関して

- ・用語や文体が正確かつ明晰であり、図表やデータ等が適切に用いられているか。
- ・参考文献・資料等の引用や注記が適切におこなわれているか。

（5）独自性と意義に関して

- ・出された結論や論証の方法などにおいて、独自性と学問的意義・社会的意義を持っているか。
- ・今後の研究への発展可能性を持っているか。

（6）不正行為に関して

- ・資料に対し、捏造、改ざん等の不正な取り扱いをしていないか。
- ・先行研究の成果等の盗用や作為的な取り扱いをしていないか。

2. 最終試験について

最終試験は、原則として口述試験にて行い、学位授与方針を踏まえて、以下の観点について、修士学位又は博士学位を授与するに十分な水準にあるかどうかを審査する。

修士学位の最終試験の評価は、A（100点～90点）、B（89点～80点）、C（79点～70点）、D（69点～60点）を合格とし、E（59点以下）を不合格とする。

博士学位の最終試験の評価は、合格又は不合格とする。

- (1) 論文内容に関する質問に適切に回答することができたか。
- (2) 論文の学問的意義・社会的意義について示すことができたか。
- (3) 当該分野の研究に必要な言語能力や基礎となる幅広い知識を示すことができたか。
- (4) 取り組んだ研究課題を広く活用する応用能力を示すことができたか。
- (5) 研究者や高度専門職業人に求められる高い倫理観や社会的責任の認識を持っているか。

3. 評価結果の取扱いについて

学位論文の審査結果及び最終試験の評価結果については、成績原簿及び成績証明書に記載する。

4. 評価結果に関する問い合わせについて

学位論文の審査結果及び最終試験の評価結果に関する問い合わせは、「成績評価問い合わせに関する取扱要領」を準用する。

- 1) 問い合わせは、成績証明書が交付される学位授与式日より起算して2週間以内に「審査結果問い合わせ書」に基づき、自身の審査結果について、問い合わせることができる。ただし、不合格者は、修了者発表日から起算する。
- 2) 問い合わせの結果、評価結果に変更が生じたときは、研究科委員会において審議・決定する。

5. その他

- 1) この取扱要領に定めのない事項については、研究科委員会において審議し、決定する。
- 2) この取扱要領は、2015年7月1日から施行する。

以上

(参考)

【学位論文審査基準に関する補足説明】

(1) テーマ設定に関して

論文のテーマを設定するにあたっては、そのテーマが当該研究分野において有効なテーマであるかが問われます。それまでに追究されてくることがなかった新しい課題や、その課題を解明することによってそれまでの研究史を見直すことができるようなテーマであることが望まれます。ただし、それまでの研究史において繰り返し追究されてきたテーマであっても、その論文の論証によって従来の研究を補強したり、別の論証の仕方を提示することができたりするのであれば、それも有効なテーマになり得ます。そうした問題意識を持って、テーマ設定が明確になされていることが重要です。

(2) 研究方法の適切性に関して

設定したテーマを追究し、結論に導いていくためには、それにふさわしい適切な研究方法が選択されている必要があります。当該研究分野においてさまざまな研究方法が用いられているはずですが、テーマに沿った分析・考察をおこなう際、多くの研究方法の中からもっとも有効な方法が選択されていることが重要です。また、選択したテーマと研究方法にしたがって、データ・資料などを適切に収集・処理することも求められます。さらに、研究にあたっては、著作権やプライバシーなど法令上の権利を尊重することはもちろん、偏見や差別に基づいた分析に陥らないよう注意し、全体として研究上の倫理に十分な配慮をすることが必要です。

(3) 論文構成と論理性に関して

論文を作成するにあたっては、結論に至るまでの過程を明示する必要があります。全体が一貫したテーマに基づいて作成されていることが必要であり、その上で問題設定から適切な順序で仮説や論証を積み重ねて、最終的に結論へ至ることが求められます。特に博士論文においては全体の考察の体系性が求められますので、論文の各章が効果的に配列された上で、論証や考察が緊密に結びつき、全体が論理的な一貫性を持つことが重要です。

(4) 論文の形式に関して

論文作成にあたっては、それぞれの研究分野において守らなければいけない形式があります。論文中の用語の意味や文体が明快で、当該研究分野で用いられている専門用語の使い方や文章の書き方に適合しているか、図表やデータ等が正確かつ有効に用いられているか、に注意をしてください。また、参考文献や資料等を用いるにあたっては、原文を尊重するとともに、著者・書名（論文名）・発行所（掲載誌）・発行年等を明記することが必要です。さらには、当該研究分野におけるルールにもとづき、必要に応じた注記を加えて本文を補うように心がけてください。

(5) 独自性と意義に関して

研究論文においては、その内容に独自性と意義があることを求められます。独自性とは、出された結論における独自性には限らず、テーマ設定自体に独自性がある、結論は同じでも論証の方法な

どにおいて独自性がある、これまで発見されていない資料を見出している、これまでされていない新たな調査をおこなっている、といったさまざまな意味での独自性があり得ます。独自性を確保するためには、先行研究の十分な検討がなされていることが必要です。また、設定された課題や導き出された結論が、今後の研究に発展し、さらに大きな成果をあげることが期待できるものであることが望ましいと言えます。特に博士論文においては、論文で設定された課題や導き出された結論が、過去の当該分野の研究史に照らして重要な学問的意義や社会的意義を持つことが重視されます。加えて、博士論文においてはそれらの基準を満たし、直ちに出版または学会誌等の掲載論文にできるような水準の論文になっていることが求められます。

(6) 不正行為に関して

研究論文においては、研究上の資料や先行研究の成果に関して、厳密な取り扱いをしなければいけません。そのためには、資料に恣意的な操作をすることなく引用・紹介し、その出典等を明示しなければいけません。また、研究の世界ではプライオリティを最大限に尊重する義務がありますので、当該研究分野の先行研究がある場合は、必ずそれを明示し、自分の論文の内容との関係を示すことが必要です。資料をねつ造・改ざんしたり、先行研究を自分の論文に無断で取り入れたりするなど、この点に不備がある場合は、その論文は剽窃または盗用をおこなったとみなされます。こうした行為が論文中に確認された場合には、他の部分でどのような意義を持つ論文であっても、その論文は審査において不合格と判定されます。

【最終試験審査基準に関する補足説明】

最終試験の目的は、提出した論文内容を確認すると同時に、提出者が学位（修士・博士）にふさわしい能力を備えているかを確認することです。したがって、提出した論文内容に関する質疑応答が主におこなわれますが、提出した論文の課題に関連する内容や、それを支える能力、さらには今後への応用能力があわせて問われることとなります。

(1) 論文内容に関して

最終試験においては、主として、提出した論文の内容に関する質問が審査委員からなされます。論文のテーマ設定、結論、研究方法、実験や調査の過程、論証の過程などについて、審査委員からの質問に適切に回答する必要があります。また、論文に十分に書ききれていない部分に関して、補足の説明を求められることもあります。したがって、書かれた内容だけでなく、それに関連する内容についても準備をして、最終試験に臨むことが必要です。

(2) 論文の学問的意義・社会的意義に関して

論文の内容が正確であることを示すだけでなく、その内容が学問的意義・社会的意義を持つことについての説明をすることも必要となります。学問的意義とは、出された結論や論証の過程がこれまでの研究に照らして独自性を持つ、研究課題に関する新たな資料の発見がある、新たな調査をおこなっている、今後の研究への発展可能性を持つ、などのさまざまな意義が考えられます。社会

的意義とは、おこなった研究が当該学問分野に限定されることなく、広く社会において共有される意義を持っていることを指します。これらの点についても最終試験において問われますし、特に博士論文においては、このような学問的意義・社会的意義を持つことが重視されます。

(3) 研究に必要な能力・知識に関して

研究を進めるにあたっては、論文の表面にあらわれる分析・考察の部分だけではなく、それを支えるさまざまな能力や知識が必要になります。最終試験においては、当該学問分野の研究に必要な言語能力や関連する幅広い知識の有無が問われます。

(4) 研究課題の応用能力に関して

学位（修士・博士）は、取り組んだ研究課題についてだけ与えられるものではなく、その研究をおこなった人の研究能力に対して与えられるという一面も持っています。提出した学位論文が学位にふさわしい内容であることはもちろんですが、論文で対象とした研究課題をそれだけで終わらせることなく、学位取得後も広く応用していく能力を論文提出者が持っていることが必要です。最終試験では、そのような応用能力の有無が問われます。

(5) 倫理観と社会的責任の認識に関して

学位論文の作成において研究能力を身につけ、それを示すことはもちろん必要ですが、その過程において、資料や先行研究を尊重すること、種々の権利に配慮すること、特定の思想や立場に偏しないこと、などの研究上の倫理を身につけていくことも重要です。また、高い学位を持つ人は、その能力を活用して社会に貢献する責任を持つことになります。学位取得後に研究者になる場合でも、その他の専門的職業に就く場合でも、こうした倫理と責任に関する認識を持っていることが必要です。最終試験ではこのような認識が問われますし、特に博士論文提出者については、この点に関する十分な認識を持っていることが求められます。